永遠の命

1． 永遠の命とは

📖 「わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰って行くのです。また、唯一の主、イエス・キリストがおられ、万物はこの主によって存在し、わたしたちもこの主によって存在しているのです。」１コリ 8:6

📖 「それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」ヨハ 3:15-3,16

📖 「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを**知ること**です。」ヨハ 17:3

📖 「わたしたちは、神の掟を守るなら、それによって、神を知っていることが分かります。「神を知っている」と言いながら、神の掟を守らない者は、偽り者で、その人の内には真理はありません。しかし、神の言葉を守るなら、まことにその人の内には神の愛が実現しています。これによって、わたしたちが神の内にいることが分かります。神の内にいつもいると言う人は、イエスが歩まれたように自らも歩まなければなりません。」１ヨハ 2:3

「神を知ること」、それは、神が人間の心に向けて発した最初の呼びかけである。聖書は、このことが思弁ではなく生活全体を通して把握されてゆくさまを示す。セム人にとっては、“知る”(ヘ:yāda')とは、単なる抽象的な知識以上のことであり、**対象との実存的関係を表わす**ものだからである。彼らによると、なにかを知るとは、それについて具体的な体験をすることを意味する。たとえば、苦しみ(イザ 53:3)・罪(知 3:13)・戦争(士 3:1)・平和(イザ 59:8)・善悪(創 2:9 創 2:17)などは、実際にこれとかかわりをもって深い影響を心に受けつつ、知られてゆく。また、だれかを知るとは、その人と人格的な関係にはいることである。それゆえ、この関係にはさまざまなかたちがあり、その程度も千差万別である。したがって“知る”という語は、きわめて多様に解される。たとえばまず、人間関係では、家族の連帯性(申 33:9)とか夫婦の関係(創 4:1 ルカ 1:34)を表わすためにも用いられ、次に神に対しても使用される。“神を知る”という表現は、神の裁きによって災いにあうとき(エゼ 12:15)、神と契約関係にはいるとき(エレ 31:34)、あるいは少しずつ神との親しい関係にはいるときなどにみられ、神認識の程度はそれぞれ異なっている。」(聖書思想辞典より)

- 永遠の命とは、神の命に与(あず)かり、神との愛の交わりに生きることです。

2．永遠の命への道

A. 愛の実行

📖 「すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、　彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」ルカ 10:25-28

B. 古い人を脱ぎ捨てる（神を無視する自己中心的な生き方への執着から自由になる）こと

📖 「さて、一人の男がイエスに近寄って来て言った。「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか。」イエスは言われた。「なぜ、善いことについて、わたしに尋ねるのか。善い方はおひとりである。もし命を得たいのなら、掟を守りなさい。」男が「どの掟ですか」と尋ねると、イエスは言われた。「『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい。』」そこで、この青年は言った。「そういうことはみな守っ

てきました。まだ何か欠けているでしょうか。」イエスは言われた。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」　青年はこの言葉を聞き、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。」19:16-22

🕮 「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。」マタ 16:25

🕮 「今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。互いにうそをついてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。」コロ 3:8-10

C.　本当の価値を知って、物事をありのまま見ること（もっていない価値や力を与えない）

🕮 「イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」（ヨハ 8,31-32）

🕮 「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。」マタ 13:44-46

🕮 「しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」フィリ 3:7-11

🕮 「わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。けれども、肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。」フィリ 1:21-24

D.　永遠の命へのペトロの歩み

🕮 「食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛(agape)しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛(philia)していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛(agape)しているか。」ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛(philia)していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われた。三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛(philia)しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛(philia)しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい。はっきり言っておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、ペトロに、「わたしに従いなさい」と言われた。」（ヨハ 21:1-19）

イエスとの出会い

Ｂ．ノヴァク

幼児洗礼を受けたわたしは、幼い時から、教会に毎週行ましたが、17 才になっても、クリスマスと復活祭を区別することがほとんどできませんでした。クリスマスはクリスマスツリーを飾ったり、クリスマスイブに特別な食事をしたりするときで、復活祭は、卵を祝別してもらうときであるということしか分かりませんでした。

17 才で高校の卒業を目の前にして、教会学校で「岩と砂の上に家を建てる」というイエスのたとえを聞いて、恐らく初めて聖書の言葉の影響を受けて、これからの人生をどうすれば良いかと真剣に考えるようになりました。そのとき、とても重要なことに気が付きました。それは、毎週教会に行ったりしても、自分がカトリックであるということは、日常生活とあんまり関係がなかったし、将来について考えても、信仰と関係なく考えているということでした。それに気がついたら、自分が実際に信じていないのではないか、教会に行ったりしても、それはあんまり意味のない習慣を守ることであって、ただ自分と回りの人を騙しているだけではないかといろいろ考えていました。そして、どんなことがあっても、自分に対して正直に生きなければならないと思って、教会に行くのをやめることにしました。けれども、そのとき、別の考えが頭に浮かびました。それは、自分がまだ実際に信仰生活をしたことがないので、何を捨てるかを知りませんし、もしかして知らずに宝を捨てるかもしれないという考えでした。結果的に、信仰を捨てようと思ったらいつでも捨てることができるものであるから急ぐ必要がありませんし、捨てる前に何を捨てるかを調べた方が賢いではないかと思って、信仰生活をしてみることにしました。

その時初めて聖書を手にして読んでみました。それから、「光と命」というカトリックの若者の運動に入りました。(ちなみに、その時「若い無神論者の会」にも入会しましたが、数ヶ月後この会が潰れました)。

聖書を読んだり、祈りをしてみたり、「光と命」の集会にほとんど毎週参加したりして、信仰を生きている多くの人と出会いました。けれども、半年がたって、信仰について理解を深めても、心の状態があんまり変わりませんでした。続けても何もならないから、やめた方がいいのではないかと何回も思いました。

「光と命」の運動の一つの行事として、毎年二週間のサマーキャンプが行われます。あんまり期待しませんでしたが、「光と命」をやめる前にこのキャンプに参加することにしました。キャンプのとき 30 人ぐらいの中高生と共に、食事をしたり、遊んだり、遠足に行ったりして、また祈ったり、ミサに預かったり、講話を聞いて、聖書を読んで話し合いしたりしてとても楽しい時間を過ごしました。前はいろいろなキャンプに十数回参加したことがありましたが、それほど喜びに満ちたキャンプに参加したのは初めてでした。それは、信仰共同体のすばらしさの体験でした。

この体験は、わたしにとって非常に重要なものになりましたが、これよりも大事なこと、わたしの人生を全く変えたことが起こりました。それは祈った時の体験でした。

毎日夕食を終わったら皆が、聖堂に集まって夕の祈りをしました。夕の祈りの後、寝るまでは、自由時間がありましたので、皆は祈りが終わるとすぐ聖堂を出て、リラックスのタイムを楽しみました。わたしも、毎晩同じようにしましたが、この夜はしばらく聖堂に残って一人で祈りをしてみようという考えが頭に浮かびました。遊びに行きたかったのですが、この考えを無視することが出来なかったために，聖堂に残りました。ちょっとだけ祈る予定でしたが、暗くなって、戸締りをしたシスターに聖堂から「追い出される」まで祈りつづけました。ポーランドでは、8 月は、午後 10 時３０まで明るいですので、4 時間以上この祈り続けたわけです。でも。時間の感覚をまったくうしないましたので、そんなに長く祈ったということにその後気が付きました。

この 4 時間の間何かの劇的な幻を見たわけではありませんが、イエスが自分の前にいると非常に強く実感しました。肉の目で見たわけでなければ、肉の耳で聞いたわけではありませんが、その 4 時間，感覚よりもずっと深いレベルでイエスと対話をしていました。イエスは、「目の前に」実際にいらっしゃると実感しただけではなく、イエスはわたしを愛し、わたしの愛を求めているということ、また自分に従ってほしい、手伝ってほしいということを言葉で言われるよりも、はっきりと分かりました。心臓が破れそうになったほど大きな驚きと喜び、深い平安で満たされたこのイエスとの出会いがいつまでも続けることを望んでいました。

次の日、この体験について考えたとき、大事なことに気がつきました。それは、今まで、自分にとってイエスは 2000 年前の歴史的な人物とか、遠い天国におられる神であったということでした。そのために、祈りをしても、それは、わたしを愛してくださる父である神と交わる時間ではなく、ただすごく遠いところ（天国でしょうか）におられる（悪いことしたらすぐ罰を与えるので恐い）神様に一方的に話すことにすぎませんでした。そんな祈りはわたしにとって恵みではなく、義務で、しかも非常につまらなくて、わけのわからない義務でした。キリスト者としての生活も、イエスと共に生きるということではなく、色々な厳しい掟や難しい教えを守るように努力しなければならないということでした。そのために，自分にとって信仰は命の源ではなく、邪魔する大きな重荷だったわけです。それを捨てたいという気持ちになっても不思議ではありませんでした。

この体験によって、祈りだけではなく、ミサに預かること、聖書を読むこと、生きていることの意味が全く変わりました。その出会いによって生まれたイエスとの友情は、わたしにとって一番大切なものになりました。イエスに従うこと、イエスのすばらしさを宣べ伝えるることは、自分の人生の意味となりました。

次の日、イエスに向かってそんな愚かな質問をしました。「あなたに従って行けば何の報いをもらうのでしょうか？」イエスは答えてこんな言葉を下さいました。「従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。」フェ 2:19-22

そのときこの言葉の意味が全然分かりませんでしたが、イエスに従うことを約束しました。